

■ 連続公開講演会より

ヒンドゥー教と女性

ヒンドゥー教における母親のイメージについて

サンディップ・K・タゴール

皆様、こんばんは。皆様にお会いすることができて非常にうれしく思っております。主催者より、インドの女性についてお話をするようにとの依頼がありましたので、お受けさせていただきました。本日は、特にインドの女性、あるいはヒンドゥーの中での母性、「母」に焦点を絞ってお話をさせていただきます。

一 母親を象徴する神

母親というのは非常に重要な存在であります。ここにご出席の皆様のほとんどがお母さんでいらつしやる

と思います。私は父親でしかありませんので、そういう意味では非常にマイノリティーな存在であろうかと思えます。日本を見ても、日本誕生の歴史の最初の部分を思い起こせば天照大神という女神から始まっています。

日本の子供たちの守り役は、ご存じのようにお地蔵様です。しかし、このお地蔵様は、もともと日本のもではなくインドから来たものです。クシティーガルバーというのが、お地蔵様のもともとの正式な名前です。

このお地蔵様の正式な名前、クシティーガルバーのクシティー、最初の半分は大地という意味で、ガルバーというのは子宮を意味しております。そういう意味では、お地蔵様は実は女性であるともいえるわけです。アルダナリシュワルというヒンドゥー教の一人の神がおります。この神、アルダナリシュワルは半分男性、半分女性です。インドに行くと、このアルダナリシュワルの彫像や絵をたくさんあちこちで見ることが出来ます。

その半分はシーヴァという男性の神、もう一つのほうがその妻であるドウルガ、あるいはウーマを意味するところです。これはつまり、お父さんとお母さんということなのです。

中国でも同様にクワンニンという神がいます。これは日本では観音と呼ばれております。英語では「観音」のことを「慈悲の女神」と訳されております。すなわち、どういうことを意味しているかといいますと、母という存在は慈悲、カルナともいいますが慈悲を持っている存在であるということです。

あるキリストよりも、むしろマリアのほうに重きを置くということもあります。

歴史を遡り、かなり昔に話を進めたいと思います。これはブリヴェディックの時期（前ヴェータ期）、ヴェーダの前の時代で、西暦では紀元前二〇〇〇年以上前のことです。日本の方々はいろいろなところに海外旅行に行かれると思いますが、古代の歴史といいますが、文化・文明の栄えていたようなところに行きたいと考える人々もたくさんおられるのではないかと思います。例えば、エーゲ海とかベルシャとかメソポタミア、あるいはカスピ海の辺り、シリア、アラビア、あるいはキプロスの辺り、あるいはバルカン半島、エジプト、中国の一部等々、本当にそういう小アジアの地域とか、古代の文明があったところに行ってみると、どこにでも何百というたくさんの方の母親を意味するようなものが残っていることがわかりいただけるでしょう。

人はすべて子供であり、子供はすべて母親に生涯ずっと守られ続けている存在であります。母親のためでもない慈愛に守られていくわけであります。ですから

すなわち、相手に対する溢れるような思いやりや慈悲を持つていけるとする女性らしさ、それが母親の象徴であったということです。そしてまた、完全な最高のバランスということも意味しております。陰のない陽、悪のない善、あるいは白のない黒というのはあり得ない。すなわち、両方がお互いに寄りかかり合いながら、依存し合いながら存在している。これは、宗教あるいは哲学の領域だけで何か示唆されているものでは決してなく、私たちの毎日の生活の中にもこれは真理として存在しているものであります。

その人間という存在、これも完全な人間を求めるならば、女性の中にのみ母の中にのみ見出すことができるのです。すなわち、母という存在、母という姿が完璧である、完全であるということです。こういう考え方は別にヒンドゥーの考え方だけでは決してなく、この地球にあるすべての国、すべてのエスノーセントリック（民俗文化中心）にすべて存在する考え方であります。

例えば、キリスト教のカトリックを見ても、男性で

当然、その「母」という存在が完全な存在であり、姿であるとして女神となり、また、絶対なる神としてあげられていくようになったことが、すべての宗教において起きていても当然であると考えられると思います。

インドには多くの宗教が入ってきました。しかし、ヒンドゥーはヒンドゥー教独自の歴史を持っています。ほかの宗教はすべて歴史を持つていますが、ヒンドゥーにはいつから始まったかという歴史はありません。インドにおけるヒンドゥーにはヒンドゥー教もあれば仏教、ジャイナ教、セクリズム、キリスト教というありとあらゆる宗教が入り込んでいるものがあります。

ですから、本当にいま敬虔なヒンドゥーの信者の人たちが、信仰している人たちは、それらすべてがヒンドゥーであるというふうにとらえております。世界各地を見ても、では、ヒンドゥーというのは一体どういうものなのか、あるいは、ヒンドゥーはどういう人なのか、というふうに問いかけられることがあります。

す。

それに対する答えとして申し上げることができるのは、ヒンドゥーというのはすべてのものを受け入れることのできる人であるということです。まさに、この証拠となるのは、これまでの人類史を振り返ってみても、インドという国は決して他国を侵略したことのない唯一の国だということです。一つだけ例外的なケースがありまして、それは約千年前にインドの地にイスラムがやってきたことです。

当時の王がそれに対して中国に軍隊を送ろうとして、攻め入るような指揮をとったのです。そして、送られた軍隊の人たちはヒマラヤを越えて中国のほうに戦いに行こうとしたのですが、ご存じのようにヒマラヤ山脈は非常に寒くて雪や氷で覆われているので、登ろうとした兵隊たちはみんな寒くて冷たくて、氷にツルツルと滑ってしまつて上に上がれずインドの地に戻ってしまったのです。

これは歴史上の事実ですが、冗談混じりにインドは他国を攻めたことがない国であることを強調するとき

に使われます。インドという国は何千年の長きにわたって平和を愛する姿勢をずっと保ち続けてきた国であるということがいえます。

二 ドウルガ女神

まさに、この中で「母」という存在は平和の具現化した姿、象徴であります。近年になり、この千年間に話を戻してみますとインドにいる神の一人にドウルガという神がいます。これは、いまでも毎年十月にドウルガを祝うお祭りが行われています。実はこの十月二十六日にドウルガのお祭りが終わりました。

このドウルガという女神は秋の奉納、耕した物とか食べ物、象徴の神であり、また、秋という暑くもなくさほど寒くもないという、一番いい季節の象徴でもあります。よいもの、よきものの象徴と考えられている女神です。

このドウルガ女神はまたお米の神様でもあり、バナナの神様、あらゆるハーブの神様、春を象徴している神、母の神でもあり、大地を象徴する神でもあります。

母であり大地であるということで、大地はすべて、野菜であれ、果物であれ、主食であれ、そこから得られるものとつながっていますので、本当に母なる存在と

いいですか、母なる神というふうにいまでも愛されております。

彼女の旦那様はシーヴァです。ドウルガは別の名前もたくさん持っています。ウーマと呼ばれたり、パルヴァティとも呼ばれております。パルヴァティというのはパルヴァの娘という意味で、パルバットというのは山を意味します。この山というのは非常に有名な、日本でも非常に愛されておりヒマラヤのことです。

だからドウルガは別名パルヴァティで、その名前が示すのはヒマラヤの娘ということです。その彼女が毎年秋になると人間の世界にやって来てくれる。十日間ほどご滞在される。つまりお盆のようなものです。

女神は人間の世界に戻って来てくれて、阿修羅がいて人々を困らせていたりとか、あるいは、ほかの悪鬼が騒いでいるいろいろな問題を起こしているとなると、彼女はその問題にちゃんと対応してくれて物事をうまく

収め、十日目に安心して帰る。インドの人々は本当に、一家の娘のように彼女のを見ています。

このような現象はヒンドゥーの中にのみ存在するものだと思います。というのは、神、あるいは女神一人の人が本当に家族の一員という感じでとらえられているのです。その証拠に家族、私たちの名前も神や女神の名前にちなんで行けられた例がたくさんあります。

そのドウルガが十日目に「さよなら」をする前に、その一家の一番長老である女性、母親はドウルガの彫像なり銅像のところへ行つて耳元でこそこそ何かをささやく。何かわかりますか？「娘。また来年もちゃんと帰って来てくださいね」と、本当のお母さんがそのドウルガちゃんにいうわけです。

ですから、こういうヒンドゥーの中での神、女神、あるいは聖なる神に対する信仰、あるいは信ずる思いは本当に家族としてのものなのです。

また、たくさんさんのリシは、これは聖者という意味ですが、たくさん神と話をしたり、遊んだり、ボクシングをしたり、レスリングをしたりして、「お前はそんな

によくない。俺のほうがいい」というようにコミュニケーションというか、やり取りをするのです。

そのように非常に密着しているのですが、別のもう一つの例として私たちの生活の中にあるものですが、その聖なる者の一人に、ラーマクリシュナという人がいます。彼は八十年か九十年ほど前に亡くなっています。

三 結婚の形式

また結婚に関してですが、インドにおいては様々な結婚の形があります。まず一つはブラハマという結婚の形で、これはお父さんが娘にとって一番適しているという人を選んで、その人に、「この娘を嫁に」というふうにお話をする形の結婚です。

もちろん、彼本人がヴェーダ、神の意志をきちんとわかっているということがただし書きについています。そのヴェーダというのは教典です。その教えをすべて理解しているというのが条件です。

もう一つの形は、女性が僧侶と結婚をするという形

やんと目が覚めていない状態で、寝ているなり薬でふらふらとなっているなりという覚醒していない状態で、男性がその女性をふつとさらってどこかへ連れていくという形です。

インドという国は本当に大きな国で、その地域とか人、カースト、システムなどいろいろな違いによってこの八つの結婚の形がいまでも行われているのです。

四 敬愛される母親、女性

今度は仏教のほうに少し話を進めますと、仏教においても、またジャイナ教においても、女性が宗教的な意味でも社会的な意味においても一番高いレベルに置かれていることを示す数多くの証拠があります。

お釈迦様、ブッダですが、かなり頭の堅い頑固な人だったようです。彼自身女性をあまり好きではなかったように、家族を捨てて出家したのですから、非常に頭の堅い方であつたように思います。

ご存じのように、釈迦が成道をするというときに村長さんの娘が釈迦のところにやって来て、スジャータ

であります。これはダイヴァと呼ばれております。もう一つ、アルシャという形もあります。この中では、男性のほうがお金なり牛なり何なり、自分が持っている財産を娘さんのお父さんに差し出してお願いに行くという形であります。

ブラジャパッティアというのが別の形です。それは、娘のお父さんが男性・女性両方に対して、幸せな生活、人生を送りなさい。それだけで終わるというものです。もう一つの形はアスーダと呼ばれるものです。このアスーダという形では、結婚する花婿のほうはお父さん、家族、親戚、家族全部にわたって、彼の所得の限りのお金をすべて差し出すという形です。

もう一つありまして、ガンダルヴァという形もあります。これは日本で非常に人気を博している結婚です。これは、男性、女性、本人たちが相手を見つけて選ぶ。また別のものがありまして、ラクシャシャという結婚もあります。これは、男性が無理やり女性を家からさらっていくというものです。最後、八番目ですが、パイシャチャというものがあります。これは、女性がち

という名前の娘さんですが、疲れた釈迦に食べ物をお供えすると、釈迦がふつと元気を取り戻す話があります。

彼女がつくって釈迦に捧げた食べ物、お米をミルクで炊いたおかゆだったのです。スジャータは本当に美しい女性でした。当時のインドのカーストの中では低い身分の女性だったのですが、とても美しい人でした。その後、釈迦はスジャータに恋をしてしまいます。というのは、彼女が母親のような存在になったからです。

インドで、「世界で一番美しい女性はだれですか」と人に聞くと、「お母さんです」と答えます。ほかの国ではどうかわかりませんが、インドでは少なくともそうなのです。とにかく、釈迦はスジャータに恋をするわけですが、こういう種類の愛であつたかは私たちにはわかりません。しかし、少なくとも彼にとっては彼の眼を開かせるものであつたわけです。

というのも、事実、その後釈迦は女性に対して非常に優しくなりました。彼が後につくっていく仏教教団

の中でも女性が認められるようになり、厄として入ることを許されますし、結婚していても、たとえ未亡人であっても、彼の傘下に女性が入ることが許されるようになったのです。

昔は、男性は外に狩りに出かけて女性は家にいる習慣がありました。家で女性たちは何をしたかというところ、子供たちの面倒を見て子供たちにいろいろなことを教えていたのです。すなわち、女性は最も偉大な教師であるといえるのです。非常にクリエイティブなこともたくさんします。料理に始まって、いろいろな考え方を子供たちに教え込んだり、男性を大事にしないといふことまで、いろいろな教えを子供たちに与えていくのです。すべて家からスタートしました。

その中で女性は、非常にクリエイティブな最高の教師という存在だったのです。私自身もこのように近代、いまの社会に生まれ育っていますが、例外なく母親から読み書きを教わり、またラーマヤーナ、マハーバーラタという何千ページにも及ぶものを教えてもらい、それはもう私が十歳になる前から、母が教えてくれました。

マリア。それから、日本にも二回来られて私自身もお目にかかる機会がありました、マザーテレサがいます。このように、人類史何千年の期間にたくさんの人たちの名前をいま例として挙げましたが、もともとたくさんさんの、女性がいかに尊ばれていたかを示している人たちがいます。しかし、この何千人もいる人の中でノーベル平和賞をもらった女性はマザーテレサ一人なのです。

このインドには、たくさんさんの、ニルヴァーナという涅槃の境地に達したと言われている女性がおられます。また、おりました。これまでの歴史の中で女神としてあがめられた人たちが実際にたくさんおられます。同じことが、ジャイナ教、キリスト教、またシーク教においてもたくさん見られます。インドに行かれる機会がありましたら、ぜひ、どこかでジャイナ教の寺院も一度お訪ねになっていただきたいと思います。

西部にアブという山がありますが、その山には本当にすばらしい寺院があります。これはすべて大理石でできておりまして夢のようなすばらしい寺院です。そ

した。あるいは、他人に対してどういうふうに接していくとか、社会の中で人間としてどう振る舞うべきか、どういう言葉を話していくべきかも全部私は母から教わりました。英語も、二歳ぐらいのときに母親から最初に教わりました。母親が私の最初の英語の先生だったのです。

歴史上かなり昔から近代に至るまで、多くの有名な女性たちがいます。いろいろな種類の宗教の集団に入っている人たちであります。名前だけ申し上げます。シュリデヴィ、サラスワティー、これは日本語では弁財天です。ガンガ、これはガンジス川のことです。パルヴァティ、さつき言いました山の娘ですね。チャンディー、マハカリ、シャバリ、アハリア、シータ、ガンタリ。ずっと名前がたくさんあるのですが、より近年になりましたサラダデヴィ。ヌールジャハンはインドの王様の妻であり、シャージャハンというタージマハールをつくった人の母親。ちなみに彼女はインド人ではなくて、いまのイラン、ペルシャから来た人です。また、これは近年ではないですが、キリストの母親の

ここに彫られているいろいろな彫刻を見ていただきますと、男性・女性で彫られているのが夫婦ではなくて、教師と母親というつながりになっているのです。本当にすばらしい寺院で、世界でも類のないものです。

したがって、母親に対して十分なる崇拜、あるいは威厳を捧げなかった社会には、決して進歩・発展はありません。

この発展・進歩というのは、もちろんいろいろな方法、いろいろな角度から語ることができると 생각합니다。一つには物質的な進歩、そしてもう一つは精神的な進歩です。

私がここで母親に対して十分なる崇拜を与えない社会が云々と言うときには、精神的な豊かさ、精神的な進歩を言っております。先ほども少し言いましたが、ヒンドゥー、インドにいま住んでいる人々にとつて、宗教的なものは、日常の一挙手一投足の中にとつて、染み込んで、生活の一部になっています。

先ほど言いましたそれぞれの人の名前に始まって、あるいは、物の考え方とか、あるいは、よく子供たち

がする遊び等においても、宗教の側面が本当に浸透しています。例えば、遊びの中でも、「君はラマ役」とか「君はクリシュナ役」というようにして遊んでいます。インドネシアもそうです。

インドネシアに私も行ったことがあります。ほぼ一〇〇%イスラム教の国ですが、そこでもラーマヤーナ教が本当に生活の中に浸透しています。バリ島とかインドネシア等に行かれると、シャドーブレイ、影絵と言うのでしょうか、そのシャドーブレイの演劇がありますが、ストーリーもほとんどすべてラーマヤーナからとられたものです。

インドネシアの古典舞踊でガムランという音楽もあります。それが全部ラーマヤーナから出ています。とにかく、インドは人口が十億人以上の国になっています。ですが、インド亜大陸において、パキスタン、バングラディッシュといまは分かれてしまっています。その分離してしまうときにたくさんの方が起きて、いままで歴史の中で、このインド亜大陸に起きたことのなかったようなことがその後ほとんど起きて、そ

れは分裂を決めてしまった人たちに対して非常にショックな影響といえますか、結果を及ぼすものになりました。それがまさにインドの人たちの考え方も変えていきました。

五 インド女性の現況

すなわち、分かれた後のそれぞれの国のたどった道のりを考えれば、本当にインドの人たち、特にインドの女性たちはいかに自分たちに対して大きな自信を持ち、確信を持ち、自存の輝きをさらに光らせるようになったかおわかりいただけると思います。現在に至ってインドの女性の活躍を見えますと、たくさんの方の社会の分野で、たくさんの方が活躍しています。教師や、あるいは大学の教授、作家、医者、あるいは芸術家、音楽家、哲学者、政治家、または科学者、あるいは裁判所の中の大司教であったり、あるいはレスキュー隊を指揮する人であったり、あるいはホームキーパーに始まって、たくさんの方が警察や軍隊、空軍、海軍、エアラインのパイロットもおりますし、また、

議会で議員として活躍する人、大きな企業の中で重役

や、あるいは、その役員として活躍する人。弁護士、または判事、そして首相も女性です。また、給料のレベルも男性と同等であります。ただ、まだまだ女性にとつて不幸な習慣等も残っているのも事実です。例えば、ラジャスタンやカルナタカ、ビハールといった州では、夫がなくなると、その夫のお葬式のときに夫の遺体とともに妻は火の中に飛び込まねばならないという、サティという習慣が残っていたりします。確かに非常にひどいことなのですが、これは八百年前ぐらいに端を発しており、イスラムがインドにやってきたときからになります。ご存じのようにイスラムがインドにやってきてその国を征服したのですが、征服者としてインドの女性を襲ったり略奪をしたり、いろいろな悪いことをしました。ですから、自分の夫がイスラムに殺されたときには、そんなことをされるならば夫と一緒に死んだほうがましだということから始まっております。もちろん、そういう決まりがいまもあるわけではないのですが、習慣的に実行される場合があ

ります。

また、ダウリーという習慣もあります。これは、娘側が男性、夫になる人にたくさんものを差し出さなければいけないという習慣ですが、これは、だんだんとなくなりつつあります。娘がたくさんいる家は破産してしまいますから、こうしたこともだんだんとすたれてきています。また、異なるカーストの間では結婚が許されていなかったのですが、インターカーストマリッジといいまして、カーストを越えた結婚も近年急速にふえてきております。私の家族にも、もともと私の家族のカーストはブラーマン（バラモン）ですが、インターカーストマリッジの二つの例があります。一つは、叔父がイスラムの女性と結婚をしました。もう一つのインターカーストマリッジは私本人でありまして、カースト枠のない外国、日本の女性と結婚をしました。妻を初めてインドに連れて行ったとき、私の父親が彼女に会って即座に家族の寺院に連れて行きました。私の一族は本当に伝統的な大家族制度に基づいた大所帯でありまして、大きな家に子供たちとか召使いとか

たくさんの人々が暮らしているのですが、そこに彼女を初めて連れて行って一週間ぐらいたったときに、私は若旦那で父は大きい旦那でしたので、その召使いの人たちが私に、「若旦那、一体どこであんなすばらしい吉祥天を見つけてきたんですか」と言うのです。インドのいろいろなところから出てきている彼らは、低いカーストの人たちですが、まさに本當の地に足のついたインドの人たちなのです。そのインドの人が、吉祥天として彼女を本當に受け入れたわけですね。

もう一つ質問されたのは、「若旦那はバラモンですかね」、「そうだよ」、「彼女もバラモンなんですか」ということです。「いや、彼女は別の国から来たんだ。そんなものはないところから来たんだ」と。それで、「制度のない国から来ているけれども、でも、確かにそういう制度はないけれども、日本ではすべての人がバラモンなんだよ」というと、彼らは「なるほど」と感心をしてくれました。

最後に簡単なエピソードを紹介して話を終わりたいと思います。ベンガル文学の有名な作家、ボノフー

に住んでおります。そこでは、ほとんどの家に牛が一緒に住んでいます。そして、牛乳を飲んで力をもらってみんな大きくなります。

ガヴィマタといまして、これは乳牛母です。母親として大切に思うぐらいあがめている牛の肉を食べることはできない。でも、昔、ヒンドゥーのところでは、どこに行っても牛肉を食べられないようなところはないのです。

宗教的ないろいろな文献を見ても、牛肉を食べてはいけないということは書いてないし、もともとそういう教えは全然ないのです。古い昔、本當に偉い教師の位の人たちというのは子牛を食べていました。だから、教師の役である聖者の人たちも子牛を食べていました。でも、子牛は食べても母牛は決して食べなかったのです。以上で話を終わらせていただきます。

ルの短編（実話）からの話です。あるベンガルの小さい村では、たくさんの人が「私の母親が亡くなりました。すぐに葬式に参列してください」というレターを受け取りました。

そのお葬式のレターを受け取った人たちはショールを身にまとって、きちんとした喪服を着て会葬に行くわけです。そこには年老いたドクターですが、男性がその人たちを迎えて、「ありがとうございます」と挨拶をしていました。もう七十歳ぐらいの人です。

会葬に来た友人がドクターに、七十歳ですから、「ドクター、あなたのお母さんがまだご存命だったとは知りませんでした」といいました。するとドクターは、「彼女はずっと元気でした。でももう今はいません。どうぞ拜んであげてください」といいました。

その家の裏のほうにみんな慌てて行きました。そこにあつたのは牛小屋です。中には一頭の牝牛が死んでいました。「私の母です」とドクターがいいました。

これはインドでの話です。インドでは牛肉を食べません。インドの人口の八〇%ぐらいの人がこういう村

（サンディップ・K・タゴール／追手門学院大学教授）

（本稿は、二〇〇一年十一月二日に行われた講演内容に加筆いただいたものです。）